

はじめに

『源氏物語』は揺れ動く。平安時代も、鎌倉〜室町時代も、江戸時代もそうだった。現在もそうである。

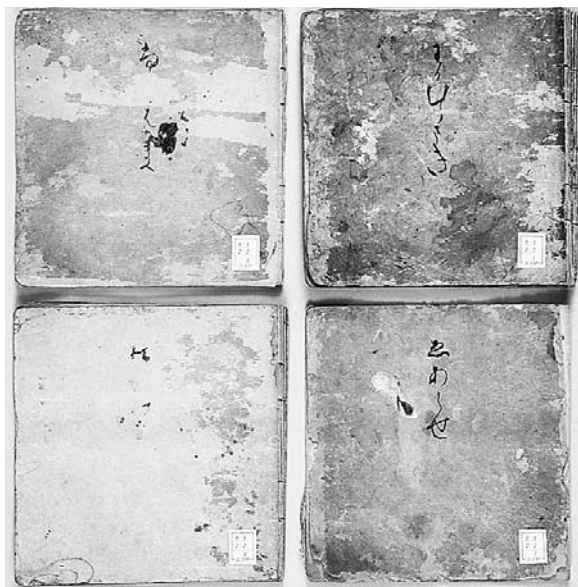
一つは、『源氏物語』の本文が揺れ動く、ということである。二つには、句読の切り方によって、文の気脈が揺れ動く、ということである。三つには、どこからどこまでが『源氏物語』なのか、その境界が揺れ動く、ということである。

『伊勢物語』『うつほ物語』『枕草子』『更級日記』『狭衣物語』などと同様、『源氏物語』に、作者自筆本というものは現存しない。平安時代に成った物語や仮名日記は、写本しやほんによって読まれ、伝えられた。江戸時代には、版本はんぽんとして刊行され、読まれ、伝えられた。或るものは失われ、或るものは現在にまで伝わっている。『源氏物語』であれば、現存する写本は、およそ一五〇〜二〇〇種ほどを数え得ようか。問題は、それら写本が、同一の本文を伝えていないという点にある。作者自身が本文を改訂したこともあるし、読者が書き換えたこともある。あまたの写本、あまたの本文のうち、どれがオリジナルに近いのかは、わからない。

歌集や漢詩文集とは異なり、物語は、作者署名を持たない。『竹取物語』『伊勢物語』『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』などの写本の表紙に作者名が記されたことは、一〇〇〇年間、一度もなかった。物語とは、そのレヴェルのものであったということである。『枕草子』や『無名草子』の証言がある⁽¹⁾とあり、物語は、読者によつて積極的に書き直されるものであった。片桐洋一が言う⁽²⁾とおり、物語は、複数の作者・複数の読者の手によつて成長し変容するものであった。であるから、我々は、『源氏物語』の各巻を考察するときにも『源氏物語』の写本を比較するときにも、⁽³⁾「⁽⁴⁾どれが原作者の手になる部分か？」とか「⁽⁵⁾どれが後人の改竄部分か？」とかいった幼稚な問いは、棄て去るべきである。ホンモノの『源氏物語』など、どこにもありはしない。これまでに存在し、いま存在するすべての本が『源氏物語』である。

一般の『源氏物語』読者の中には、新編日本古典文学全集や新潮日本古典集成や角川ソフィア文庫に活字化されている『源氏物語』を、原作者が書いたものであるかのように思い込んでいる向きがあるようだが、大いなる錯覚である。

第一に、新編日本古典文学全集や新潮日本古典集成といった『源氏物語』注釈書は、およそ一五〇〇種ある写本の中から特に定家本や明融本や大島本⁽⁶⁾を撰取して、一般読者にも読み得るテキストを提供しているに過ぎない。定家本や明融本や大島本が作者自筆本に近いのか遠いのかは、まったくわかっていない。新編日本古典文学全集や新潮日本古典集成といった『源氏物語』注釈書は、ただ、藤原定家が書写した『源氏物語』に近づこうとしているだけである。であるなら、そ



国文学研究資料館蔵、橋本本『源氏物語』4帖



橋本本「松風」巻

れら注釈書に採用されなかつたあまたの写本たちが、定家本や明融本や大島本とどれくらい異なり、どのような物語を呈示しているのか、考察せねばならない。本書第一部では、平安く鎌倉く室町く江戸時代を通し、『源氏物語』の本文がどれくらい揺れ動き、それによって物語がどのように揺れ動いて来たのか、写本ごと・時代ごとに辿ってみた。

第二に、新編日本古典文学全集や新潮日本古典集成といった『源氏物語』注釈書は、校注者それ

ぞれの判断で、写本の文字列に、句読点を付し、濁点を付し、鉤括弧を付し、漢字を宛て、改行を施し、仮名遣いを変え、誤字を正し、そうして、一般読者でも読み得るテキストを提供しているに過ぎない。通常、平安く鎌倉く室町く江戸時代の物語写本には、句読点も濁点も鉤括弧も付いていない。和歌の冒頭以外では改行されない。漢字もほとんど使われない。であるなら、色眼鏡を棄てて裸の眼で写本の文字列に向き合い、どのような気脈でコトバが紡がれ、どのような別解があり得るのか、考察せねばならない。本書第II部では、複数の写本を見比べつつ、私の古文読解力によって、一から句読点を付し直し、鉤括弧を付し直し、ダッシュを付すという実験によって、平安和文独自の気脈を浮び上らせてみた。

第三に、新編日本古典文学全集や新潮日本古典集成といった『源氏物語』注釈書は、全五四巻を整然と並べ、『源氏物語』をあたかも一個の長篇であるかのように収めているのだけでも、その体裁は、平安時代物語のありようと甚だしく齟齬している。通常、鎌倉く室町く江戸時代の『源氏物語』写本は、一巻あたり一帖(二冊)、という単位で存在する。それぞれの表紙には、「きりつほ」「は、き木」などと記されるだけで、第何巻という序数は、記されない。書写者が序数を振った写本もないではないが、すべてを1、2、3…と数えるのではなく、「並び」の巻は勘定に入らず、「若菜上下」は一巻と数えるので、全「卅七」巻となる(本書「散佚「桜人」巻をめぐる」に挙げた『拾芥抄』の「源氏目録」を参照)。つまり、『源氏物語』の各巻は、執筆された順序も不明、読むべき順序も未確定、ということである。そもそも、当初、『源氏物語』が何巻から成る物語であったのか、定かでない。であるなら、平安く鎌倉く室町く江戸時代、どこからどこまでが『源氏物語』として

認識されていたのか、考察せねばならない。本書第Ⅲ部では、現存『源氏物語』五四巻以外にどのような巻が存在していたのか、また、以後、どのような物語が書き継がれ、読み継がれていたのか、残された資料から再考してみた。

くれぐれも誤解のないよう述べ添えておきたいのだが、私は、作者自筆本『源氏物語』はどのようなものであったか、という問題に迫ろうとしているのでは、まったくない。むしろ逆である。『ホンモノの『源氏物語』などどこにもありはしない』という事実をしかと受け止め、あまたの『源氏物語』たちの力動を、丸ごと触知しようとしているのである。

注

(1) 《能因本》の『枕草子』の「男も女もよろづの事まさりてわろきもの」の段や、『無名草子』の『とりかへばや』評の項などを見ると、平安鎌倉時代、物語が後人によって積極的に書き換えられていたことがわかる。以下の論稿を参照。

片岡利博「狭衣物語研究から見た源氏物語」（森一郎編『源氏物語の展望（六）』三弥井書店、二〇一〇年）

吉山裕樹「物語の改作」（伊井春樹編『物語文学の系譜』世界思想社、一九八六年）

(2) 片桐洋一「『伊勢物語』の写本論（一）〜（四）」（『源氏物語以前』笠間書院、二〇〇一年）

片桐洋一「プロローグ」（『柿本人麿異聞』和泉書院、二〇〇三年）

はじめに

本文が揺れ動けば物語も揺れ動く

「東屋」巻の本文揺動史

- i 匂宮が上か？ 薫が上か？
- ii 『湖月抄』以前・以後
- iii 三条西家の本文と解釈
- iv 揺れ動きの幅

星と浮舟

- i 鏡と浮舟
- ii 《彦星の光》のライン
- iii 『小夜衣』『更級日記』『浜松中納言物語』へ

本文の揺れ、物語の揺れ

- i 揺れ動く本文——例えば『狭衣物語』における

47	46	35	30	27	26	16	12	8	3	3	(1)
----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	-----

く動も揺も聖徳はく動も揺も文

第II部

写本を演奏するのは我々である

句読を切る。本文を改める。

- i 整理本文のレイアウト
- ii 挿入句の捉え方
- iii 追叙法の捉え方
- iv 言いさしの捉え方
- v 本文改訂の是非をめぐって
- vi 『新日本古典文学大系 源氏物語』の改訂方法
- vii 大島本の傍記をどう扱うか

脱文もあれば独自異文もある

- ii 本文異同はどのように扱われて来たか
- iii 『源氏物語』の異文を読む
- iv 本文研究における二・三の些細な問題
- i 「神うらめしうおぼさるゝ御くせ」
- ii 「うらみきこえ給に」「つらさも消えぬべし」
- iii 「けしきあること、なのたまひそよ」

138 134 131 127 123 118 114 113 102 98 93 92 76 62 54

源氏物語の写本と演奏

「と」の気脈

- i 《「…」と、「…」》型の発話文
 - ii 《「…」と、「…」》型の心内文
 - iii 《「…」と、「…」》型で、話主が交替する例
 - iv 話主交替を明示しない発話文
 - v 発話文から地の文への緩やかな移行
 - vi 心内文から地の文への緩やかな移行
- 付 「&」としての「と」

鉤括弧と異文

- i 「と」ナシ発話文・心内文
- ii 《「…」心地す》型心内文の気脈
- iii 《「…」心地す》型心内文の拒否
- iv 名詞化される発話文・心内文

どこからどこまでが『源氏物語』なのか

散佚 「桜人」巻をめぐって

i 「桜人」の佚文

194 193 185 182 180 177 175 169 163 160 155 153 152 146 145

その名『源氏物語』をウケルハビニハレハレ

ii	「桜人」の名を挙げる資料	204
iii	近年明らかになったこと	208
iv	これまでの「桜人」研究	212
v	「桜人」の散佚情況から考え得ること／得ないこと	215
散佚「巢守」巻をめぐって		
i	「巢守」研究の現段階	224
ii	源氏物語古系図の中の「巢守」関連記事一覧	226
iii	『源氏物語』とは何か？	241
付	「巢守」の古筆切、発見	244
続篇・外伝の筆法		
i	末尾に後続する続篇たち	253
ii	狭間に割り込む外伝たち	259
iii	作中人物はいかに再生するか	264

第I部

本文が揺れ動けば物語も揺れ動く

sample

「東屋」巻の本文揺動史

一五〇種とも二〇〇種とも数えられる『源氏物語』の現存写本は、すべて異なる相貌を呈している。写本それぞれがそれぞれを異本と呼び得る関係にある、と言ってもよい。『源氏物語』は、絶えまなき変異体である。あまたの写本たちは、そうした変異の種々相である。我々は、残された『源氏物語』たちを俯瞰し、それらを、揺動の軌跡として捉えねばなるまい。

i 匂宮が上か？ 薫が上か？

浮舟とその母君は、中君の暮す二条院に身を寄せていた。浮舟に求婚する少将ばかりを都の摺紳と仰いでいた母君は、ここ二条院で匂宮の麗姿を目の当りにし、その超絶的な威光に圧倒されてしまう。つづいて、匂宮と入れ替りに薫が来訪するとの知らせが入るのだが、浮舟の母君は、薫の姿を見ぬうちから匂宮を絶讚してやまない。次に掲げたのは、そんな母君の発言によって、中君とその女房たちの間にちよつと

した議論が起る、「東屋」巻の一節である。

【A】周桂本「東屋」巻（三九ウ〜四〇ウ）

〈ア〉此まらうとの母君、「いで、見奉らん。ほのかに見奉りける人の、いみじき物にきこゆめれど、宮の御ありさまには、えならび給はじ。」といへば、

〈イ〉おまへにさぶらふ人々、「いさや、えこそ聞えさだめね。」と聞えあへり。

〈ウ〉「むかひておはせしさま、^{かばイ}

〈エ〉宮はいとなさけなげに、見にくくこそみえ給しか、とりはなちては、いづれも。ともかくもわか
れず。かたちよき人は、人をけつこそにくけれ。」との給へば、

〈オ〉人々わらひて、「されど御まへにはをされ奉り給はざめり。

〈カ〉いかばかりの人か、宮をばけち奉らん。」などいふほどに、

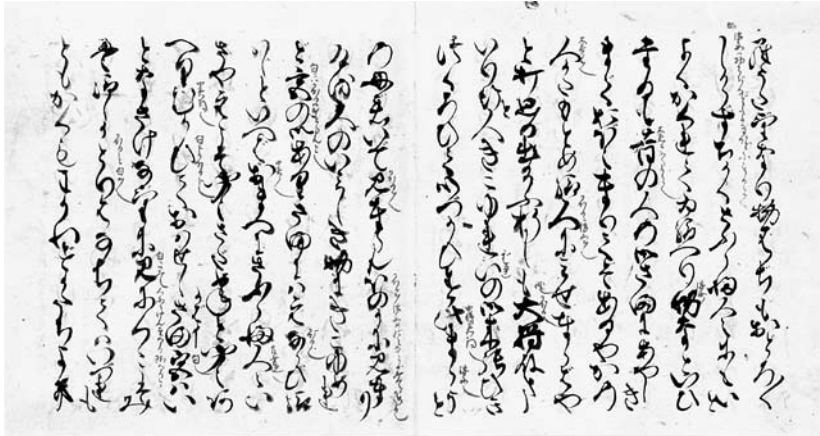
〈キ〉「今ぞ車よりおり給なる。」ときくほど、

※〈ウ〉……「さま」の右に「かはイ」と朱書してある。その他の傍記は省略した。

周桂本（二六世紀の写本）の本文である。私に、句読点・濁点・鉤括弧・傍線を付してある。便宜上、〈ア〉

〈キ〉の塊に分けた。

浮舟の母君が、〈ア〉「どれ、私も薰大将殿の姿を拝ませただごう。ちらつと拝見した人が大層なお方のように申し上げているようだけれど、匂宮様のお姿には肩をお並べになれますまい。」と口にしたのに対



天理図書館蔵、周柱本「東屋」巻（『源氏物語 千年のかがやき』思文閣出版より）

し、中君の御前に侍る女房たちは、〈エイ〉「さあどうかしら、
（匂宮・薫の優秀に）判定など申し上げられつこありません。」
と言り返す。そうこうして、〈キ〉「薫様は、今、車からお
降りになるようだ。」という声があり、薫が登場する。と、
翻って母君は、今度は薫の瑰姿にすっかり目を奪われ、讚
歎を新たにし、うちつづく感動ゆえに、匂宮・薫クラスの
貴顕指紳にこそ我が娘を縁づけたいという野望に憑かれる
ようになる。

「横笛」「匂宮」巻以来、物語はくり返し、薫と匂宮の美
質を誉め讃えて来た。宇治十帖も後半になればそうした讚
辞は不要と思われもするのだが、この「東屋」巻は、浮舟
の母君という新たな登場人物を利用し、辺境のうぶな視点
から、改めて両者の最上級の光輝性を浮び上らせていると
見える。「東屋」「浮舟」巻では、そうした母君の感激と野
心があずかつて浮舟は退き引きならぬ恋愛悲劇に落ち込ん
でゆくわけで、物語展開を鑑みると、この段階で浮舟の母
君に匂宮・薫を絶讃させておくというのは、何とも周到な
作劇手腕だと言える。まったく叙述がないものの、この場

には無言の浮舟がいて、皆の話に聞き入っているのであるから。

さて、問題にしたいのは【A】の傍線部である。ここはいささか丁寧な読解を要する。

山本春正の絵入源氏は、〈エ〉後半の「かたちよき人は人をけつこそにくけれ」の横に「浮ノ母詞」と注しているのだが、母君に「の給へば」という尊敬語が付くことはないので、誤読である。周桂本の原本では〈ウ〉の「むかひて」の横に朱筆で「中君ノ詞也」と注されており、それが適当だろう。右の鉤括弧は私に付したのだが、同様の判断に基づいている。すなわち、中君の言〈ウ〉〈エ〉は、次のようなものと読まれる。

「〔句宮と薫とが〕対座していらした様は、句宮の方はまことに潤いなさげに、見苦しい感じでした。別々に見たら、どちらも（お美しい）。どちらがどうとも決められない。容貌のよい人は、周囲の人（の美しさ）を掻き消してしまうのが困りものね。」

最初の〈ウ〉「むかひておはせしさま」は、周桂本が朱筆で「句トかほると也」と注するとおり、「句宮と薫が対座していらした様」と解される。

次の〈エ〉「なさけなげに」「見にく」という発言は、中君の句宮評としてはなかなか辛辣で、賀茂真淵が「御夫故、かくまではのたまふならん」と記したのも頷ける。ただ、〈オ〉で、女房たちはこの発言に対し「わらひて」承け答えているので、ここは、いささか冗談めかした身内謙遜の発言と解するのがよいだろう。ちなみに、山本文庫明融本や池田本では、この箇所が「人々もわらひて」となっていて、女房たち

も中君もともに微笑んでいることになつてゐる。

〈エ〉後半の「かたちよき人」の「人」は薫を指し、「人をけつ」の「人」は匂宮を指す、と解することも可能なだけでも、後者の、掻き消されてしまう「人」は、中君自身も含めた普通の人々と解す方が、いかにも中君の発言らしい。つまり、匂宮を絶讃する浮舟の母君に対し、これからやつて来る客人薫の方を称揚しつつ、匂宮が特別ではないことを身内の立場から述べ、結びとしては、匂宮であれ薫であれ最上位の美を前にしては自分たちなど気圧けいあつされてしまふと卑下して見せ、そうして両者を立てている、と読むのが妥当であろう。

対する女房たちの言〈オ〉も、問題が多い。「されど御まへにはをされ奉り給はざめり」について、『湖月抄』は「匂宮の御事也 薫にけたれ給ふ事はなきと也」と注している。吉澤義則『対校源氏物語新釈』も同様に、「けれども宮は薫に庄倒される事はございますまい」と訳している。その他、有朋堂文庫・校註日本文学大系・日本古典文学大系、与謝野晶子訳・佐成謙太郎訳・今泉忠義訳も、「匂宮だけは」「匂宮におかせられては」と訳しており、「御まへ」||「匂宮」と解しているようである。谷崎潤一郎訳は、「それでも大將殿にはお負けになりますまい」としており、「御まへには」||「薫には」と解したようだが、最終的な理解は諸注と同じである。しかし、既に〈ア〉「宮の御ありさまにはえならび給はじ」とあり、直後でも〈カ〉「いかばかりの人か宮をばけち奉らん」とあるのに、〈オ〉でも「宮は薫に庄倒される事はございますまい」と言うのは、堂々めぐりで、対話の態をなさないのではないか。この場面の前後で、薫が「大將殿」と称されていたこと、匂宮が「宮」と称されていたことに留意すべきではなかったか。すなわち、女房たちが「御まへ」と言うからには、それは、中君を指していよう。女房の発言は、「美しい貴頭によって周囲は霞んでしま

うとおっしゃる) けれど、あなた様におかれましては、気圧され申しなさることなんてないとお見受けします。(あなた様以外の) どんな人が、匂宮様を霞め申し上げられましようぞ。」と、目の前の女主人を持ち上げたものと読まれる。中君への反論がすなわち中君称美になり匂宮称美になる、そうした切り返しこそ二条院女房の返答としてふさわしい。匂宮が上か薫が上かという品評に終始しない洒脱な会話がここではくり広げられているのであり、この場面が置かれることで、母君の戯画的な田舎者ぶりや中君の鷹揚な女主人ぶりが発現される。母君と浮舟は、匂宮・薫の光輝性に驚くだけでなく、中君のいかにも匂宮夫人らしい言動にも憧憬のまなざしを向けていることだろう。

ii 『湖月抄』以前・以後

ここまで、小さな場面の読解に拘泥して来たわけだが、実は、右で読み解いた【A】の〈ア〉〈イ〉〈ウ〉は、現代の『源氏物語』読者にとっては、ほとんど初めて目にするものであったに違いない。新編日本古典文学全集や新潮日本古典集成など諸注釈書が底本としている大島本おしまほんには、このくだりが存在しないからだ。

【B】大島本「東屋」卷(三三〇〜三三二ウ)

〈ア〉このまらうとはは君、「いで、見たてまつらん。ほのかにみたてまつりける人の、いみじき物にきこゆめれど、宮の御有さまには、えならび給はじ。」といへば、

〈イ〉御前にさぶらふ人々、「いさや、えこそきこえさだめね。」ときこえあへり。